

## 木の花は

木の花は、濃きも薄きも、紅梅。桜は花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

四月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたるあさぼらけの桜に劣らず。ほととぎすのよすがとさへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず。

梨花の花、よにすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬後れたる人の顔などを見ては、たとひに言ふも、げに葉の色よりはじめてあはひなく見ゆるを、唐土には限りなき物にて文にも作る、なほさりと様あらむと、せめて見れば、花びらの端にをかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。楊貴妃の、帝の御使ひに会ひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり。」など言ひたるは、おぼろけならじと思ふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。

桐の木の花、紫に咲きたるは、なほをかしきに、葉の広がりざまぞ、うたてこちたけれど、異木どもと等しう言ふべきにもあらず。唐土にことごとしき名つきたる鳥の、選りてこれにのみ居るらむ、いみじう心異なり。まいて琴につくりて、さまざまなる音の出で来るなどは、をかしなど世の常に言ふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。

木のさまにくげなれど、棟の花、いとをかし。枯れ枯れに、さま異に咲きて、必ず五月五日にあふもをかし。

(第三五段)

【口語訳】

木の花は、濃いのも薄いのも、紅梅（がよい）。桜は花びらが大きくて、葉の色の濃いのが、枝も細く咲いている（のがよい）。藤の花は、花房が長くて、色濃く咲いているのが、たいそうすばらしい。

四月の末か、五月の初めの頃、橘の葉が濃く青いところに、花がたいへん白く咲いているのが、雨の少し降っている早朝などは、世にまたとなく情趣のある様子で趣深い。花の中から、（実が）黄金の玉かと思われて、たいへん鮮やかに見えているのなどは、朝露に濡れている明け方の桜（の風情）に劣らない。（橘は古歌にもあるように）ホトトギスにゆかりがある（木だ）とまでも思うからであろうか、やはり改めて言い表すことができない（ほどすばらしい）。

梨の花は、非常におもしろくないもので、身近でもてはやさず、ちよつとした手紙を結びついたりなどさえしない。かわいらしさの欠けている（女の）人の顔などを見ては、「（「梨の花のようだ」と）たとえに言うのも、なるほど（もつともなこと）で、葉の色をはじめとして釣り合いが悪い感じに見えるが、中国では（この花を）この上もないものだとして漢詩文などにも作るの、やはりそうだとしてみわけがあるのだろうと、強いて（よいところを探そうと）見ると、花びらの端に美しい色合いが、ほのかに付いているようである。（蓬萊の仙宮で）楊貴妃が、玄宗皇帝のお遣いに会って、泣いたという顔をたとえて、「ひと枝の梨の花が、春、雨に濡れている。」などと（白居易が）言ったのは、いいかげんなことではあるまいと思うにつけても、やはり（梨の花の）非常にすばらしいことは、比類がないのだろうと思われた。

桐の木の花が、紫色に咲いているのは、やはり趣深い、葉の広がり方が、不快におびたしいが、ほかの木々と同列には論じられない。中国では仰々しい名のついた鳥（鳳凰）が、選んでこの木にばかりとまるといのが、まことに格別である。まして（この木を）琴に作って、いろいろな音が出てくることなどは、すばらしいなどと世間並みの言葉で言い表せようかいや、言い表せはしない。それほど実にすばらしいものである。

木の姿は不恰好であるが、楝の花は、たいそうよい。枯れかかっているように、風変わりに咲いて、必ず五月五日に咲き合わせるのもおもしろい。